

## コラム 40— 済南事件に関する中国の教育と外紙等の論評

〈中国の歴史教科書〉では、「1928年、国民政府は奉天の軍閥張作霖打倒を目的として北伐を行った。この北伐部隊が、山東省の済南を占領した際、日本帝国主義はこれを阻止するため、自国民保護を名目として山東省に出兵した。日本軍は済南に侵入して、北伐軍の一部を武装解除した後、その占領地で銃を乱射し、中国軍民数千人を死傷させ強制連行した・・・略・・・」と記述されています。

これについて、〈元獨協大学教授・故中村粲氏〉は、著書「大東亜戦争への道」において「昭和3年、内戦下の中国で、北伐部隊（国民党軍）が済南占領の際、日本軍が出兵したのは自国民保護のためで、国民党軍の北伐阻止が目的ではなかった。またその際、日本軍が中国人軍民数千人を、虐殺したという中国の歴史教科書の記述は事実無根で、北伐軍から略奪・虐殺を受けたのは、日本人居留民であった」と述べています。事実は全く逆であるのです。

この済南事件の状況について、当時の5月7日付の〈上海ノース・チャイナ・デイリーニュースの記事〉では、次のように記述されています。

「すべての感情偏見を捨てて熟慮したる吾人は、挑戦者はシナ側であり、彼らに多数の死傷者を生じ、北伐の前途が危険に陥ったことは、自業自得であると観察せざるを得ない。南方が如何に巧

妙宣伝したとて世界は最近のシナの宣伝を知悉している。・・・(中略)・・・要するに今回の事件は全くその責任はシナ南軍側にあるは、公平なる第三者全部の観察である。」

＜北支の代表的外字紙である京津タイムス＞は、「日本軍がいなければ済南の外人は悉く殺戮されたに違いなく、この点大いに日本軍に感謝すべきだ。日本軍は山東省を保障占領して惨劇の再演を防止すべし」とまで論じています。

一方海外のメディアは、次のように論じています。

＜英紙デイリー・テレグラフ＞は、「中国人は略奪と殺人を天与の権利である如く暴行を繰り返しています。日本人の忍耐にも限度があり、日本軍の行動は正当防衛である。」と述べ、

＜仏紙ル・タン＞は「日本の行動は居留民保護に過ぎず、何ら政治干渉の意味はない。日本の自衛行動に憤慨するのは理由のないことだ」と、日本を弁護しています。